

地域自然回復のために

NPO 法人 森林再生支援センターニュース

特定非営利活動法人 森林再生支援センター 理事長 村田 源
〒603-8145 京都市北区小山堀池町 28-5
TEL 075-211-4229 FAX 075-432-0026
URL: <http://www.crrn.net> E-mail: info@crrn.net

ミャンマー中部高原にて

森林再生支援センター専門委員
高田研一（高田森林緑地研究所）

ミャンマーの中部高原で、地域住民のための森づくりをしたいという。その話は3年前から聞いていたのだが、私にも来て欲しいという話があったのは、昨年（2006年）5月。初めてのミャンマー訪問は7月雨季の始まりに、ということとなった。

湿度100%気温35度の（旧）首都ヤンゴンから空路、中部高原へーホー空港に着くと、ちょうど信州の快適さ。

雨季にもかかわらず、晴天の空から眺めたミャンマーはイラワジ川の大氾濫原たる平野部を越えると、森が延々と広がっていたが、この中部高原一体は、森が焼き払われて草地化したところが多く、一部谷筋の薪炭林を除いて、ところどころに赤茶けた裸地もみられる。

この森づくりのプロジェクトは、九州のNGO九州コミネット協会が、旧来ミャンマーで農業指導、教育、地域小規模発電援助などをやってきたNGO地球市民の会との共同企画として進めている。

貧しい村で、自前の土地を持たなかった人々、10家族ほどを集め、土地を確保し、日本の援助

で、家を建て、農地の区画割りをし、作物と土壌づくりを教え、あと一つ足りないもの、森をつくりたいという。その森づくりである。





ミャンマー中部高原風景

マンテル対流によって運ばれた巨大なプレートどうしがぶつかってできた南北に走る幾筋もの尾根と谷の大地形があり、谷あいでは稲作がすすめられてきたが、斜面地では一部陸稲や豆類、果樹を栽培しているが、大部分は、草地が広大に広がる生産性の低い土地である。この草地では、旧来から土地利用してきた牧畜民が火付けをしながら牛を追っている。ただし、所有権は国家（この一帯はパオ族自治組織の権限）に属し、土地の使用権と区別されているのだが、耕作地としての使用権と牧畜民の使用権はどうやら違うらしい。

農耕地として使用されていない草地の一部を囲い込んで、このナウンシン開拓村ができ、そこで森をつくりたいというのである。

ここの景色はどこか信州千曲川の上田市や小諸市辺りの高台から眺める夏景色に似ている、とりわけ、菩提樹の木陰で一息ついでいると、あまりにものどかである。

谷部の稲作地帯とは異なる、このなだらかな斜面地は、地質的にみると古第三紀か中生代のそれほど古くない時代あたりの堆積岩らしく、よく風化してラテライトの赤土層をつくっているが、石灰岩が混じる。

特に石灰岩が多い地帯では、農業的にも生産性がそれほど高くないために、牧草地以外にはあまり使い道がなかったらしい。

こういう場所で、農耕で生計を立てるといった新たな開拓村が成功するかどうか、まったく疑わしいものであるが、それでも日本側 NGO の主

導で事業は始められてしまった。

10 家族とその子どもたちの将来に対する責任を抱え込んでしまったわけである。

ミャンマーの国土はわが国の約 2 倍、人口は約 1/2 である。要するにわが国の 1/4 の人口密度であるが、どこの集落でも人が多い。とくに子ども数がいかにも多い。

例えば、わが国では 300 人ほども暮らしてはいないだろうと思われる規模の中山間地の集落でも 3,000 人は暮らしていて、小学校の校庭には、おそろいの白いシャツと緑の腰巻を巻いた子どもたちが溢れている。

今年（2007 年）の 3 月に 2 回目のミャンマー訪問をしたとき、外国人立ち入り禁止区域となっている、このような村を訪れた。このとき、どうやって暮らしているかと聞いたら、以前はケシ栽培をしていたという。今は政府からダメと言われていて、現地の人にはニヤッと笑った。

確かにケシ畑は道沿いでは見当たらない。そして、わずかに残った森が伐採され、火をかけられ、畑へと変わっていく様子が手に取るように分かった。

以前のように高い土地生産性を確保できないため、行き着く先は森林破壊と農地への変更しか選択肢がないのだ。それでも、まだ増えすぎた人口を支持していくのに足りない。

ナウンシン開拓村は、このように溢れた人口の一つの吸収手段でもあるが、生計が立たないとどうにもならない。

農業で生計が立つのか、森づくりやそれ以外で生計が立つのか？

農業で生計が立つかといえば、これまで農耕地としての利用を行ってこなかったことから分かるように、立地としてはたいして良くない。作る作物も豆であったり、芋類であったり、トウモロコシであったりして、各戸あたりの 1ha ほどの農用地面積では持続的な経営が危ぶまれるほどである。

そもそも日本の NGO は何を考えて、このような開拓村をつくったのかといえば、南九州の芋作りに成功した土壌微生物、堆肥づくりの農業

技術を教えてやろうということらしい。

熱帯特有の有機物分解の速さをもつ土地柄、便所さえ、穴を掘って、汲み出しする必要がないほどのところでは、肥料を施すという発想がそもそも欠ける。そこで、働きの良い微生物を含む堆肥をやれば、生産性が増すということなのらしい。教えを垂れるのが好きな日本人らしい発想である。

2回目の訪問では、村民の一部は農業をとっくにあきらめて、村に隣接する街道筋に一軒の売店を立て、そこで皆がたむろしていた。

そこで森づくりである。この開拓村に森をつくる意味は一体あるのか？



ナウシン開拓村森づくり予定地

村民にとって、必要不可欠な森林資源は、燃料用の新材である。次に、場合によって、主食に取って代わるマンゴー、ジャックフルーツ、パイナップルなどのさまざまな果実を生み出す木がある。ガソリン代替品となるアブラギリや貴重な木材資源となるチークは小規模営農者にとってはほとんど縁がない。街道筋にはパナマングァーとか称するマメ科の花木が植えられるが、これも生計の経済とは関係がない。

初回訪問時、NGOの手配ですでに用意されていた苗木は、アブラギリ以外の実に多様な樹種の苗木であって、多少の救いは、この樹種選択を考えた人が、ある程度、樹木の性質に詳しく、マメ科などの初期活着のよい先駆性樹種を多めに調達しておいてくれたことである。



植栽苗木（これは？）

これら名前の分からない数十種の苗木を並べて、考えた。

（ああー、苗木が小さすぎる。それにしても、これらの樹種の性質を形だけで考えないといけない。）

たぶん、この苗木は（奇数羽状複葉などの形を見て）強い光でも大丈夫だろう、これはもう少し日陰に育つ木だろうとか。

そのとき、村民の一人が、これは山ではこういうところに生えているとか、この木は高さ何フィートになるとか、横に立ちながら、色々教えてくれる。

そこであなたがリーダーだ。私はミャンマーの木は分からないけれど、よく似た木（例えばシリブカガシに近縁な樹種もあるし、サクラ属もある）があって、この樹種はこういう風に植えるとよく育つと、具体的に伝えた。

そこで、その村民と協力して、集団指導体制で木を植えた。

日本側で私と手探りで考えてくれたのは、熊本の澤治彦さんと、佐藤俊一さん。

澤さんは、ランドスケープデザインの九州の第一人者、佐藤さんは、九州の著名な植物研究者である南谷忠志さんの弟子で、林野庁の植生調査（森林資源の多様性調査）も任されて一人で担っている人。頼りになるこの二人を交え、通訳を介して、やり取りしながら、いよいよ植えた。



上下：植樹の様子

苗木を植えるとき、その配植（どの位置にどの木を植えるかという、立地の選別と、苗木どうしの位置関係、密度）がきわめて重要である。一つ一つの樹種について、性質を細かく聞きながら、5年後にこれくらいの樹冠となる。20年後にはこれくらい大きく育つとか教えてもらいながら、位置を決めていった。

あえて告白するが、そのとき、私はすっかりと村民の生計の立て方ということは忘れ去っており、この場所で今植えようとする木がいかにかうまく、元気で大きく育ってくれるかということにだけに夢中であった。

例年に比べ、きわめて雨の少ない雨季で、苗木の状態も悪く心配したが、2回目の訪問となった今年3月には、苗木の70%は生き残っており、ほっとした次第である。そこで、初めて気

がついた。これで良いの？

私は日本に帰り、早速、このミャンマー森づくりプロジェクトに参加するNGOの人々や澤さん、佐藤さんに宛てに長いメールを書いた。以下の通りである。

（前略）

私が森づくり（緑化、自然保護、自然再生、林業）のプロとして、ミャンマーに生きる人々に何が出来るのかということを思うとき、ひとつ気がついたことがあります。

それは長い目でみて、ミャンマーの将来のため、地球環境のための森づくりを、私はお手伝いすることができますが、現時点では、ほとんどその余地がないということでした。

つまり、日本より2倍の面積、半分の数の国民しかいない国でありながら、私の見たパオ族の村はどこも人口問題が深刻で、今をパオ族が自力で暮らすことができる経済、生活資源の確保を優先しなければならないということでした。

マキをつくる森（薪炭林）の高度な育成、管理の方法はまだまだ不十分で、あまりにもムダの多い粗放的な利用しかされていません。

広く見られる焼畑は、焼きっぱなしで農地を得るためにだけの森の破壊にしか過ぎず、森火付け 畑作 畑作 畑作 森へ戻す、といった循環型の焼畑経営ではないように思われました。

このような破壊型の畑作では、やがて地力が落ちて、生産性も下がってきます。表土の侵食も頻繁に起こってくるかもしれません。

また、粗放的な放牧は、意図的に行われる火入れによって、森林の後継樹（森をつくる木々の幼木）を多く含む低木の群落を焼き尽くし、自然のもつ種多様性（Species Diversity）をますます破壊していき、なだらかな山腹の自然性の高い森は回復がきわめて難しい環境にあります。村民たちに大きな恵みを与えてきたケシ栽培は、表向きは作れなくなって、これに変わるほど生産性の高い代替作物はありません。

いま生きる人々を、私がプロとして助けることができることは、生活に役立つ植物の育て方、その管理の仕方へのアドバイスだけです。

しかし、人々は、その必要性をいまだに十分認識しておらず、むしろ、生活のカンフル剤である、お金を持ってきてもらう人のやってくることを期待しているようです。

もちろん、観光客のもたらすお金をどう落とさせるかといったアイデアも多少はできるかもしれませんが、それも観光客の訪れるルートに近い地域でのことだけで、広い範囲で適用することが難しいのが現実です。

日本人がミャンマーまで出かけて、何か役立つことをしようというのは、2つの動機があるかもしれません。1つは、金もちの足長おじさんの善意を振り撒きに行く。もう1つは、これからの地球、日本にとっていよいよ深刻な問題となる持続可能な社会をどうデザインしていくのか、これを日本とミャンマーで経験を積み、知恵としようという志で行く場合でしょう。

持続可能な社会づくり = 「循環型共生社会」をつくらうとする意気込みはよく分かりますが、貧しい人々に金品を施すよりも、はるかに難しいのが、後者の場合です。

確かに、日本には歴史的にみれば、社会の隅々にまで、すみ分けの文化があったし、ミャンマーにもミャンマー式択伐に代表されるような環境保全型の技術の底流と、何よりも、あるときは戦いになったとしても、共存の文化があったからこそ、異なる多くの少数民族が存続してきたのだと思われまます。

だから、地球に生きる人類の明日を考えると、循環型共生社会の実験場として、競争原理で生き抜いてきた欧米ではなく、アジアの、日本とミャンマーの人々が新たな文明の開拓、あるいは、かつて生き生きとしていた、人々どうし、人々と自然の共存を可能としてきた、循環型で、共生的で、かつ環境負荷の少ない文明への新たな回帰を目指すというNGOの考えはよく分かる行動原理です。

しかし、私は、循環型共生社会理念に基づい

たさまざまな具体的事業は確かに可能なのですが、このときの制約条件、つまり、現場での人々のあり方やふるまい方をよく踏まえておかなければ、理念先行で、気がついたときには、空しさだけが残る結果となってしまうのではないかという危惧を常に胸に抱いています。

自然体で、理想とするパラダイムに至るには、われわれは毒を食らい過ぎています。

その毒の渦中であって、それでも、生存可能な、持続可能な社会システムを構想していかなければなりません。ミャンマーもその毒の渦中にあることは例外ではありません。

安価なエネルギーと西洋的実証主義、プラグマティズムが、科学を発展させ、人々の命を「救う」医療をもたせ、資本を拡大し、その「恩恵」をこの「辺境の」国に浸透させてきたとみななければなりません。このことは否定すべきことでもないし、これこそが人類史といえるものです。

ミャンマーにおいても、西洋医療は、子どもたちの命を救い、食の充実は、村に多くのお年寄りの姿を見させるようになりました。この近代の当たり前の「幸福」が地球環境にとっては「負荷」というのは、酷なことです。

しかし、このささやかな幸福を持続しようとするれば、今以上に森を破壊し、農地に変え、さらに大規模、効率的な生産を目指さなければ、到底維持できない現実があります。

それを認めた上で、この文明がもたらした負荷 = 人口の急速な増大とそれにもなう環境破壊について、その克服が最大のテーマであることはどなたも承知されていることだろうと思います。

人々のささやかな幸福をさしおいて、この文明にまったく対置する価値観；日々の暮らしをより貧しくし、人々の命を奪うことさえ厭わない方法論によって克服しようとするのは、空想的なことではないかと思われまます。

原理的には、循環型共生社会の理想に基づいていたとしても、実際には、「毒を食らいつつ」、どうしても増えすぎた人口を徐々にクールダ

ウンしていく漸進的な改革しか選択肢はないと思われま。そうでない限り、戦争などの大きな不幸に襲われることを免れないのではないでしようか。

このためには、資本の蓄積している地域から、市場原理を最大限に利用することによって、資本を還流、あるいは収奪し（欧米流のやり方を逆手に取る）、一方では循環型生産システムの導入と、産児制限などの社会的課題を同時にこなし、大きな村から小さな村へ、大きな都市から小さな都市へと縮んでいくことが善であり、金持ち、長命が人生の幸福ではなく、自然に従うことが、そこで生き生きと働いてきたことが幸福であり、美德であるという価値観へと、心をゆるがす改革を進めていくことが大切なのではないかと思われま。

もっと具体的に言えば、日本からのお手伝いとしては、ミャンマーで観光やCO₂クレジットなどで、先進国からしっかりと稼ぎ出す戦略をしっかりと支えま。次に、今ある村がその土地面積、土地資源に見合ったサイズで、資

源を効率的、循環的に活用する工夫を現地の人々と一緒に考えま。子どもたちの教育プログラムも日本の子どもたちも参加できる形を考えながらやっていくことも良いかもしれま。

これからのミャンマーは中国と同じように、かつての日本と同じように、村から都市へという人口流動の大きな波が押し寄せてくることではよう。

しかし、辺境の村の暮らしには、人々がお互いに支えあう共生、共益、「共敬」の姿が今なお息づいており、日本人こそが学ばなければならないものがあることをつよく感じま。



ミャンマーの子どもたち



カックー遺跡

～活動報告～

岩井川ダムの緑化計画とモニタリング調査

奈良県が建設した「大和川水系岩井川治水ダム」(奈良市；以後、岩井川ダム)において、ダム上下流の右岸、左岸法面における緑化計画を立案し、その植栽指導にあたってきました。

ここでは、計画地が南向きの花崗岩質片麻岩で保水性を欠くこと、著しい頻度でのシカの食害を受けることなどから、緑化設計のための苗木試験植栽、防鹿柵試験、その他植生調査等を実施し、計画策定をすすめてきました。計画立案や調査は2002年からの5年間に及んでいますが、その間、緑化の工事も進捗し、試験調査の結果と施工後のモニタリング調査を加えて、順応的手法で業務を遂行しつつあります。

これらの調査と計画策定は、今年度をもって完結する予定ですが、その第一報として、緑化計画の概要およびモニタリング調査で明らかになってきたことについて報告させていただきます。

【対象区域について】

岩井川ダムは奈良市の市街地中心部から車で十数分の距離にあり、近傍に観光道路である高円山ドライブウェイの分岐点がある。また、現場を通る県道は東進して山添村に至る。渋滞することはないが、県道の交通量は多い。さらに現場は春日山原生林の南南東2.5kmの距離にあり、世界遺産のバッファゾーンにあたる。

岩井川河岸はかつて農用林として利用されていた後に成立したと考えられる放置植生に覆われ、その一部はスギ林となっている。上部の右岸山腹斜面には薪炭生産に供していたクヌギ・コナラ林がある。左岸はスギの人工林が多い。また特に右岸部では、奈良公園方面から生息領域を拡大したと考えられるシカが多い。このシカによる食害で、遷移の進行は妨げられ、ナンキンハゼなど有毒(不嗜好性)の樹木の群落、ススキ群落、その他外来性植物群落しか成立しない。皮肉なことに緑化区域は奈良市内であるため天然記念物であるシカを殺すことはできない。

岩井川は東西に流れ、緑化対象箇所を中心とする右岸は、採石場跡地から連続する南向き斜面である。特に県道下部の片麻岩が風化したマサ土によってつくられた盛土法面は、通気性は良いが、保水性にやや劣る。採石場跡地の建設残土を埋め立てた法面は、採石前の原地形に応じて、水みちがあり、緑化対象箇所のところどころで、過湿条件となっている。

【対象区域に期待される緑の機能】

このような条件の下で、回復される緑には次のような機能が期待される。

春日山原生林の生物多様性がシカによって低下しているため、理想的には地域固有の遺伝子資源にも配慮しながら、地域生態系の豊かさを補完できる多様性の高い緑＝森林環境の復元。観光的なポテンシャルが高い立地でもあるため、森林の再生過程では県道沿いの美しい樹林景観が望まれる。たとえば南の吉野に対して奈良県北のサクラの名所となる美しい樹林景観の創造。

自然と調和の取れたダム景観の創造。特に自然景観に調和する岩盤緑化群落の定着の工夫。

低管理型の樹林環境

高密度のシカの存在下でも存続できる多様な森林環境の創造。その技術的確立。

建設残土上での森林環境の復元



岩井川ダム全景

【緑化の考え方】

前項の基本方針に基づき、具体的な緑化の計画を以下のとおり立てた。

1. 多様な樹種苗木を用い、その樹形特性と、場所・他種との関係特性に応じた配置（部分的に苗木を高密度で植える＝密植、今現場では同一樹種苗木3本一組の巣植えを導入）をすることによる低管理型の緑化技術（自然配植技術）の考え方を基本に計画。

自然配植技術協会ホームページ（<http://www.shizennhaisyoku.net>）参照

2. 地域の遺伝子に配慮するための実現可能な対応として、近畿に自生地をもち、かつ植木生産者によって生産されている地域性苗木77種を適用。

3. 多様性の高い森をつくるために、苗木植栽を行う。

4. シカの食害を受けないための新たな対策（新防鹿柵）を提案。10～32㎡程度を小さく囲うパッチディフェンス型防鹿柵を開発。

素材は、モウソウチク、マダケを用いた竹製のものと、市販されている溶接金網製の2タイプ。現在、竹製のものは試験区のみを設置。竹製は伐採時期と施工時期の合致、入手可能数量と施工規模のバランスの調整が難しいなど、施工現場での大規模な導入は困難な状況にあるが、分解性の生物材料である利点を生かす実績を積むため、部分的であっても導入の可能性を検討中である。

パッチディフェンス型防鹿柵；数十本の苗木からなる小樹林範囲を囲うタイプの防鹿柵。従来からある防鹿柵は、区域全体を防鹿柵で囲うタイプ（ゾーンディフェンス型）や苗木1本ごとに防鹿基材を施すタイプ（マンディフェンス型）であった。この防鹿の考え方は、小範囲を囲うことにより、シカがこの防鹿柵を檻と認識し、再侵入の確率が低くなること、小範囲を実生、幼木集団の生長に合わせ次々と経時的に移し替えていくことにより、シカの存在も一部許容できる。森林の更新環境を担保できるという利点も合わせもっている。岩井川ダムでは苗木が大きくなったらパッチディフェンス型防鹿柵を外し、樹皮剥ぎ防止対策（樹幹基

部から1.5mの高さまで、針金を螺旋状に巻きつける）のみを講じる予定である。



試験区にて竹製防鹿柵を設置
（2003年2月17日）

5. 緑化対象地が南向き斜面であり直射日光が当たる場所であることを配慮して、苗木の活着率向上のために遮光柵を開発し、各巣植え苗木3本に1基の割合で設置。

6. 土壌水分蒸発を防ぎ、地温上昇を抑制するために、ススキ（現場で刈ったススキの再利用）による10cm厚のマルチングを行う。



溶接金網製防鹿柵内に設置された
遮光柵とマルチングの様子

【モニタリング調査】

1. 過去に緑化された現場の植生

切土法面、盛土法面、採石場跡地に9ヶ所の調査区（10m×10m）を設定し、植物社会学的調査方法による植生調査、木本実生動態調査を行っている。調査区は当初、播種工による緑化が行われたが、シカによる食害が著しく、ススキ、シナダレスズメガヤ、コマツナギ、外来種でシカの忌避性が強いシオザキソウ、レモンエゴマ、アメリカオ

ニアザミなどの草本群落となっている。木本もやはり忌避性の強いナンキンハゼが個体数、樹高とも増加している他は、アキグミ、センダンなどわずかな木本の幼木だけしか生育していない。ナンキンハゼは播種由来ではなく奈良公園一帯に植栽された個体からの種子散布（分布拡大）によると考えられる。



ススキ群落の中で生長をするナンキンハゼ

2. 竹製防鹿柵試験区のモニタリング調査

2003年2月に設置した周囲長約10m（円形）の竹製防鹿柵と2004年7月、9月に設置した3m×9m（方形）の竹製防鹿柵の試験区においてモニタリングを行っている。円形防鹿柵内では植栽木の生長は非常に良好であったが、方形防鹿柵は支柱を減らしたために強度に難点があり、設置後2年目にシカの侵入を許した。

竹製防鹿柵は前述したように現在のところ大規模な導入は困難な状況ではあるが、近年のモウソウチク林拡大による地域生態系破壊の影響を抑止するための市民による積極的な竹伐採、利用の運動などうまく連携する道が拓ければ、場所によっては、これを用いることが適しているものと思われる。



左下：竹製防鹿柵（円形）設置3年半後の様子
上：竹製防鹿柵（方形）設置2年後の様子
（2006年9月撮影）

3. 植栽苗木施工後のモニタリング調査

緑化の本施工にともない、2004年度施工箇所植栽苗木2,836本（2005・2006年度調査）、2005年度施工箇所植栽苗木6,034本（2006年度調査）の計8,870本を「健全木」「非健全木」「枯損木」の3ランクに区分し活着状況のモニタリングを行っている。

2005年度のモニタリングは苗木枯損率が5%と低かったが、2年目の2006年度のモニタリングでは16%とやや高くなっている。

枯損木の発生は設計者の設計ミス、材料の品質不良、施工業者の技術的欠陥、現場固有の不良環境、シカ、ウサギ、ネズミによる食害、または虫害、事前に想定された自己間引きによる「健全な」枯死のいずれかに起因する可能性がある。現地調査の結果からは特定の箇所、特定の業者が施工した区域内での枯死率が高くなっており、による枯死の可能性が高いほか、によるものも存在するものとみられる。

特に「荷札の取り忘れがもたらす苗木の首締め」や「まとめ植え」（巣植えでは苗木の枝が触れ合う程度の間隔におくべきところを、ほとんど同じ位置にまとめて植える）など施工時に注意することによって回避できるケースもみられた。

センター事務局よりお知らせ

～ 最近の森林再生支援センターの活動～

「京都東山森林管理協議会準備会」「京都東山風景林『地域に根ざした文化的な景観』検討委員会」に出席

2006年12月1日(金)、2007年2月9日(金)、2007年3月8日(木)に開催された「東山森林管理協議会準備会」および「京都東山風景林『地域に根ざした文化的な景観』検討委員会」に本センター専門委員が委員として出席しました。

「京都東山森林管理協議会準備会」は森林資源の循環利用、森林環境の保全・整備、環境教育の推進、木の文化再生と文化的価値の発信などの、自然力・文化力・人間力の再創造により京都に根ざした文化を振興する「東山森林管理協議会(仮称)」の設立に向け協議会委員、部会委員の選出、サポーターの募集、事業内容、事業実証試験等の検討を行いました。

「京都東山風景林『地域に根ざした文化的な景観』検討委員会」では多種多様な東山の景観計画の棚卸を行い、今後の東山風景林整備の方向性の多面的検討をすること、東山を森林資源と捉え、家具材利用など実証試験を行うこと、東山における森林管理情報システム構築の検討を行うことを検討事項に挙げ、議論を行いました。

「善気山で観察の森づくり」に講師派遣

2007年1月28日(日)にフィールドソサイエティー主催の京都法然院の裏山(善気山)での森づくりに本センター専門委員が講師として参加しました。この回より「観察の森」までの新しい道(森の道)づくりが始まっています。

「モミプロジェクト」始動

2006年5月27日に毎日新聞社創刊135年記念事業委員会等主催により比叡山で開催された「大植樹祭」をきっかけに、比叡山のモミ林を保全・再生の声の本センター会員より上がってきました。またその頃ちょうど募集のあった2007年度イオン環境財団助成金に応募をしたところ、2007年4月からの活動について助成金をいただけることになり、4月からモミプロジェクトを始動することになりました。

活動内容は、世界遺産の地であり、わが国において稀少となったモミの天然林が残る比叡山にて、自生モミの種子から育苗、被陰されたモミ実生の育苗のための移植、モミ苗木のシカ食害防止といった一連の活動を市民参加によって行うことにより、比叡山の大きく損なわれたモミ林の生態系を息永く育成していく取り組みの基礎づくりを行おうというものです。具体的には比叡山モミ林予備調査、市民向けのシンポジウム開催、モミ実生の採取・育成イベント開催、モミ実生保全施業の実施(防鹿柵設置等)等を行う予定です。開催時期や詳細はこれから協議を重ねます。

活動に興味があり、モミプロジェクトメンバーとして活動したいという方がいらっしゃいましたら、是非、森林再生支援センター事務局までご連絡ください。

センター活動へのお問い合わせ、ご意見・ご提案、センター入会申し込みは下記まで
特定非営利活動法人 森林再生支援センター事務局
〒603-8145 京都市北区小山堀町28-5
TEL 075-211-4229 FAX(TEL兼用) 075-432-0026 E-mail:info@cmm.net